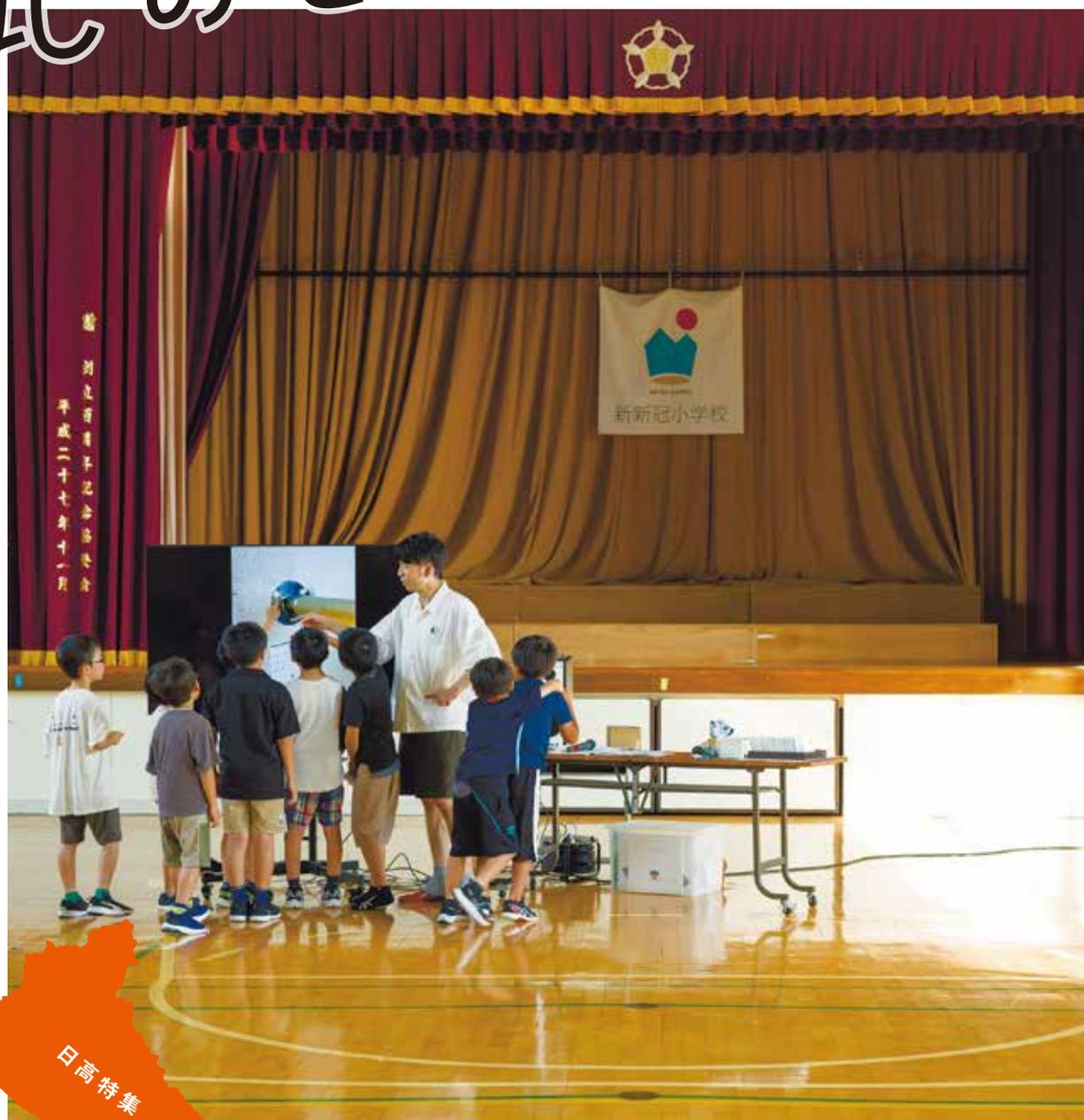


# 北のとびら

vol. 132

令和6年3月



日高特集

特集 | 令和5年度北海道文化財団こどもアート体験事業

見立てでつくる空想の学校「にい にい新新冠小学校」

朝日小学校・新冠小学校×加賀城匡貴

アート巡礼 日高エリア／つくる人in平取町 こだまみわこ／ジモトデザイン 新冠町・いにかっぶピーマン

マチカド芸術 新ひだか町『カエル』／ART FILE 橋口潤平

新しい学校に通う、という明るい出発にしたい



## 統合する2つの学校が見立てを介して交流

2024年4月に統合される新冠町の朝日小学校と新冠小学校。両校の子どもたちの交流を深めることを目的に、アーティスト・加賀城匡貴さんによる「子どもアート体験事業」が実施されました。両校で取り組むのは、“見立て”で新しい空想の学校「新新(にいにい)冠小学校」をつくること。見立てとは？空想の学校とは？加賀城さんにお話を伺いました。



朝日小からイメージする太陽、幌尻岳などの山々、新冠小の体育館の屋根といったモチーフを、「冠」のイメージを軸にデザインした校章

「両校のPTAの皆さんがとても熱心で、懇親会も開いてくれるなど、僕自身も皆さんの交流をすっかり楽しんでしまいました」と加賀城さんは笑顔で話します。

「にいにい」はまだ名前と校章しか決まっていない、どんな学校にするかはみんなと一緒に考えていきたい、と子どもたちに伝えると、興味を抱いてくれました」と加賀城さん。空想の学校「にいにい」の校章を目にした子どもたちの中に、新しい学校への期待が芽生える手応えを感じました。

「朝日小学校との別れを軸にするのではなく、両校の子どもたちが全く新しい小学校に通うという、明るい出発にしたいと思ったんです」

**児** 童減少に伴う小学校の統廃合が全国的に進んでいる昨今。海と空と大草原に囲まれた新冠町でも、朝日小学校が100年を越える歴史に幕を下ろし、2024年4月から新冠小学校に統合されます。アートを介して子どもたちを交流させたいという両校の希望を聞いた加賀城さんが最初に思ったのは、「朝日小学校の閉校を、寂しいものにはしたくない」ということでした。

と加賀城さん。そこで企画したのが、既存のものを別の見方で捉えることで、人の顔や動物など他の何かに見えてくるという「見立て」の手法で、みんなイメージを膨らませて新しい空想の学校「新新(にいにい)冠小学校」、通称「にいにい」をつくること。



### Profile かがじょう・まさき

1975年、北海道生まれ。英ポーンマス芸術大学中退。99年に「笑い」をテーマにしたステージパフォーマンス『scherzo』をスタート。公演／展覧会やワークショップなど、独自の活動を続けている。企画・原案を手がけたNHK Eテレ『ミ・タ・テ』で、札幌ADC準グランプリ、東京TDC賞ノミネート。著書に、学校図書『脳トレ! パックとブック』(教育画劇)、絵本『ねぐせきょうだい』(中西出版)。

### 空想の学校の校章をデザイン

加賀城さんがまず着手したのが「校章」のデザイン。両校の校舎や新冠町の大自然などをヒントにアイデアを練り、それぞれの学校で校章をお披露目しました。



# 「新冠町」朝日小学校 × 新冠小学校 × 加賀城匡貴

scherzo主宰・アーティスト・絵本作家



扉の取手が  
視点を変えると...  
悲鳴をあげる  
一つ目小ぞう!

見立てでつくる空想の学校  
新新冠小学校

子どもアート体験事業  
国内外で活躍するアーティストが学校や文化施設に出向き、子どもたちと一緒にワークショップや制作活動を行い交流する事業

PHOTO/表紙・会場写真：大橋泰之（マカロニ写真事務所）、溝口明日花（マカロニ写真事務所）

こどもたちの中にしっかりと根付いた「新しい学校」という気持ち

07 夏休み中にも関わらずお披露目会には100名近い児童や保護者が集まりました  
08 「これって怪獣に見える?」「こうすると足に見えるね」など、大人も楽しそうに想像力を働かせています



08



07



10



09

09 加賀城さんとこどもたち。僕もそう見えた、私はこう見えた!など元気な声が次々と上がっていました  
10 お披露目会に向けて、新しく発見した見立て作品のタイトルを清書

11 最終日は「にいいい」の学校要覧を配布。見立てで先生を紹介したり、沿革や目標、校歌も書かれている本格仕様です  
12 美術館となった校舎内を親子で見学



12



11

会を行い、朝日小学校が見立て作品「にいいい」の仲間を展示する美術館となりました。「見立て作品探しでは、自然と両校の混合チームも出来ていて、非常に嬉しく思いました」と加賀城さん。「新冠小学校の1年生の女の子が、図工の時間に色画用紙で空想上の校舎を作ってくれたり、高学年の男の子が4月から学校の名前を本当に「にいいい」にしたと思っているんだ、と声をかけてくれたり。みんなの中に新しい学校という気持ちがしっかりと存在していることを改めて実感しました」と、振り返ります。

空想の学校、「にいいい」をつくることを通して、両校のこどもたちが仲間になっていく。こどもたちの想像力を源に、閉校する寂しさや不安は、新しい学校へのワクワクに変わっていききました。「4月からは新冠小学校がこの町の唯一の小学校になる

まだまだたくさん! 会場写真をWEBで公開中



たいです」

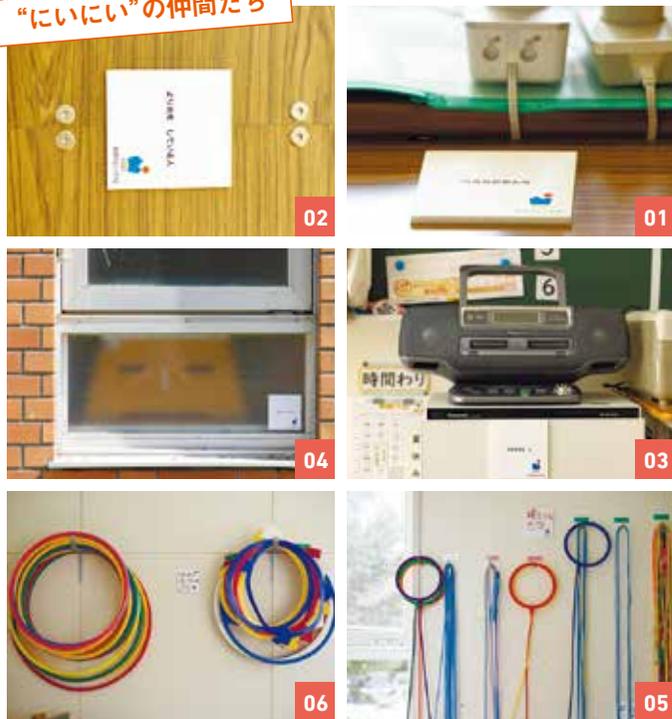
でも存分に楽しんでもらいます。今回の活動の中で、こどもたちは見立て作品を探しながら、同じものを見ても、別の人が見ると、違う名前やタイトルになることを知りました。この経験を活かし、それぞれスタート地点が違っても、新しい学校に向かっていく過程の面白さや発見を、学校生活の中でも存分に楽しんでもらいたいです」

最後に花束を受け取った加賀城さん。「新冠町はご飯もおいしくて、自然が豊かでとても楽しく、こどもたちとの交流で僕自身にも多くの発見があった充実の1ヶ月間でした」



見立てを通して、両校児童の「アイデア」が交流する

朝日小にいる見立て作品「にいいい」の仲間たち



01 電話の子機とコード。新冠小のタイトルは「べろながおんな」。実は朝日小のタイトルも「べろんちょ」でした 02 顔を傾けると見えてくる「よりめをしている人」 03 「さかさまな人」は、タイトル通りさかさまにするとわかります 04 すりガラスの向こうに見える飛び箱に付けられたタイトルは「ゆめをみている」 05 06 両校のこどもたちで見つけた見立て作品「なわとびのたき」と「丸目と矢じるし目」

朝日小学校の場合

※新冠小の場合は役割が逆になります

- 1 朝日小の学校内で見立て作品を探して、タイトルと説明を考える
- 2 見つけた見立て作品は写真だけを新冠小に提示
- 3 新冠小の児童たちが新たにタイトルをつける
- 4 朝日小が見つけた見立て作品と新冠小のタイトルを組み合わせることで完成!

自分たちが考えたタイトルと、両校のこどもたちが見つけた見立て作品を組み合わせて完成!

見つけたのはスイッチプレート。朝日小のタイトルは「バナナを食べている途中の人」。新冠小のタイトルは「はながながいぬ」

学校内で探す「にいいい」の仲間

活動初日、教育委員会の協力も得て、「見立て」の授業を全クラスで行なった加賀城さん。新冠町に約1ヶ月間滞在し、2つの小学校を歩き来しながら活動を続けました。

「この企画の要となるのは両校の交流です。朝日小学校と新冠小学校は距離があり、頻繁に行き来するのは容易ではありません。そこで考えたのが、アイデアの移動です」と加賀城さん。

「まずは学校内を観察しながら見立て作品（にいいいの仲間）を見つけ、タイトルを考えます。そして、そのタイトルを伏せてもう一方の小学校に写真を展示し、新たにタイトルをつけてもらいます。すると、同じものを見ても、見立てる人が変わること、タイトルが全く違うものになるんです。これまで、さまざまな学校で見立ての活動をしてきましたが、今回は初めて

僕自身のアイデアを挟まないように心がけました。こどもたちのアイデアがそのまま両校を歩き来することで、直接顔を合わせているわけではないけれど、しっかりと交流することができました」

見立ての楽しさを学校生活に

1ヶ月間の活動の最後、朝日小学校を会場に2日間、にわたって両校の交流会とお披露目を開催しました。初日は協力し合いながら見立て作品を探したり、校庭で給食を食べるなど大盛り上がり。翌日は地域の皆さんも招いたお披露目

全部で24個の見立て作品を探すゲーム。タイトルをヒントに学校中を探索しました



# 日高で探すアート

※掲載されている営業時間やイベント開催日時等が変更になる場合があります。

刺激がいっぱい  
日高のアートスポット



## 07 段ボール特有の凹凸で立体感を演出したアート ひろ・くわおり 蝦夷 桜美術館



“暖”ボールアーティストのひろ・くわおりが開設した私設美術館。自身が営むこんぶ屋で使用される段ボールを活用し、鳥や風景、花などをモチーフに独自の技法で描いた作品が並びます。

- 住所 / えりも町字底野649-17 ●TEL.01466-4-7288
- アクセス / JR北海道バス「庶野診療所前」停留所から徒歩3分
- 開館時間 / 9:00~17:00
- 休館日 / 不定休
- 入館料 / 無料 ●駐車場 / あり

## 06 公民館で楽しむ美術鑑賞 様似町中央公民館



「直木賞」受賞作家・河崎秋子の『土に贖う』のカバー画を描いた様似町出身の画家・久野志乃さんの絵画2点を常設展示。ほかにも北海道にゆかりのある画家の作品も展示しています。

- 住所 / 様似町大通1丁目21 ●TEL.0146-36-2521
- アクセス / JR北海道バス「様似」(旧JR日高本線様似駅)から徒歩5分
- 開館時間 / 9:00~21:00 ※日曜のみ17:00まで
- 休館日 / 月曜、年末年始
- 入館料 / 無料 ●駐車場 / あり
- https://www.apoi-geopark.jp

## 05 乗馬公園内で堪能する伏木田光夫の世界 伏木田光夫美術館



浦河町出身の画家・伏木田光夫の初期から1990年代後半までの作品を常設展示。生命の輝きをとらえようと闘う画家の創作世界の一端を感じることができます。

- 住所 / 浦河町字西横別327-9 浦河町乗馬公園クラブハウス内
- TEL.0146-28-1304 ●アクセス / JRバス「日高横別」から徒歩15分
- 開館時間 / 9:00~16:00
- 休館日 / 月曜(祝日の場合は翌日の火曜日) ※臨時休館日あり
- 入館料 / 無料 ●駐車場 / あり
- https://www.town.urakawa.hokkaido.jp/gyosei/culture/?content=235

## 04 人口2万人の小さな町のライブハウス LIVE&BAR KAVACH



新ひだか町で唯一のライブバー。2000年のオープン以来、地元アーティストの表現の場として、また、メジャーアーティストの演奏に触れられる場として、音楽文化を発信し続けています。

- 住所 / 新ひだか町静内吉野町1-1-31 ●TEL.090-1520-9005
- アクセス / JR北海道バス「御幸町」より徒歩1分
- 営業時間 / 20:00~25:00
- 定休日 / 不定休
- https://www.facebook.com/bar.kavach/?locale=ja\_JP



## 01 平取町のアイヌ文化振興拠点 二風谷工芸館



北海道で初となる伝統工芸品に指定された「二風谷イタ」(木製の盆)や「二風谷アットゥシ」(樹皮の反物)などの工芸品を展示・販売。博物館では木彫を体験することもできます(10名~要予約)。

- 住所 / 平取町字二風谷61-6(平取町アイヌ文化情報センター内)
- TEL.01457-2-3299
- アクセス / 道南バス「資料館前」から徒歩3分
- 開館時間 / 9:00~17:00 ●休館日 / 12月31日~1月5日(年末年始)
- 入館料 / 無料 ●駐車場 / あり
- https://biratori-kanko.jp/enjoy/nibutani-culture-center/

## 02 板金塗装を応用して表現する唯一無二の世界観 アートファクトリートマト



日高町出身の美術家・千代明のアトリエ兼ギャラリー。宇宙や自然界のエネルギーをテーマに、板金塗装の技術を駆使し、独特の世界観を表現した作品が広がります。

- 住所 / 日高町字平買111-4 ●TEL.01456-2-2637
- アクセス / 日高自動車道(高速日高道)富川インター出口から左正面
- 開館時間 / 10:00~12:00、15:00~18:00
- 休館日 / 不定休
- 入館料 / 無料 ●駐車場 / あり
- https://artfmatomo.official.ec

## 03 タイをはじめとしたアジア雑貨が勢揃い essence(エッセンス)



店主自らが買い集めたユニークなアジア雑貨を販売。服飾や食器、おもちゃ、手作り家具などジャンルもさまざま。敷地内にはドームハウスや車輪付き倉庫もあり、遊び心たっぷりの空間です。

- 住所 / 新冠町北星町22-1 ●TEL.0146-47-3711
- アクセス / 道の駅サラブレッドロード新冠より車で2分(徒歩の場合は10分)
- 営業時間 / 10:00~19:00
- 定休日 / 木曜
- 駐車場 / あり
- https://sorelami.wixsite.com/essence

日常に溶け込むデザインの魅力に迫る！



▲ロゴデザインはピーマンのグリーンと、新冠町の花であるツツジの紫を組み合わせた2色使い。視認性が良く、親しみやすい丸みを帯びたフォルムも魅力。デザインを手がけた株式会社ファームステッドは、生産者の想いをカタチにするため、現場に通い、風土を感じ、生産者と顔を合わせて話をすることを大切にデザイン提案で、農業や第一産業の活性化に取り組んでいる。



北海道で出荷量1位！  
ブランド野菜  
「にいかつぶピーマン」

**新** 新冠町でピーマンの生産が始まったのは、約40年前のことです。年々生産量が増えていく中で、土づくりからこだわり、規格の統一化を図るなど、ブランドピーマンとしての地位を確立しました。2016年には、収穫したピーマンを選別・仕分け・箱詰めする選果場の新設を機に、シンボルとなるロゴを一新することに。

「にいかつぶピーマンのブランドを象徴するデザインを作り、その価値を見たいにもしっかり反映させたい」と、制作を依頼したのは株式会社ファームステッド（本社／帯広）。代表取締役でクリエイティブディレクターの長岡淳一さんは、デザインで農業と地域を発信するモデルを作り、農業のブランディングや、全国各地での講演活動も精力的に

行う、いわば“この道のプロフェッショナル”です。

「制作の過程で何度も現地に通って、農協の担当者やピーマン部会の方々と対話を重ねました」と振り返る長岡さん。実際に栽培している様子も見学し、生産者たちがピーマンづくりに傾ける情熱を肌で感じたと言います。さらに新冠町では当時、道の駅でピーマンのソフトクリームを販売するなど、特産品のピーマンによるまちおこしに力を入れていたため、役場にも足を運びました。それは長岡さんにとって「にいかつぶピーマン」への理解を深め、地元の人たちと“共感”を積み重ねていく大切な時間でした。

半年以上かけて、構想を含めると100案にもおよぶアイデアの中から最終的に選ばれた

ロゴマークは「生産者」「農協」「行政」三者を3つの輪に見立て、つながり、交わり、結ばれてゆくイメージを形にしたもの。「みんなでにいかつぶピーマンを大切に育てていこうという気持ち、絆を表現しました。全体のフォルムはもちろんピーマンです」。丸みを帯びたローマ字やひらがなもこだわりの一つ。「生産者の方々のやさしさに触れて、温かみのある書体がいな、と」。

町の花・ツツジを連想させる紫をアクセントカラーに用いる



◀ピーマン部会の視察や講習会の記念撮影には、ロゴ入りのフラッグを持参。中央に掲げている。

ことで、新冠町で作られたピーマンであることをさりげなく表現したと言います。

「日本中で生産されているピーマンですが、ダンボールや店舗陳列用のパッケージに印刷されているロゴを見ると、新冠産であることが一目でわかります」と語るのは、新冠町農協農産課の課長・島山拓也さん。「今後も『にいかつぶピーマン』のブランド価値を高め、知名度の向上につながる取り組みを継続し、成果を上げていきたい」。挑戦は続きます。



版画家 こだまみわこ

**日** 高山脈を源とする沙流川の清らかな流れ、馬がのびのびと駆け回る牧場。雄大な自然に囲まれた平取町に、版画家・こだまみわこさんが移住したのは30年以上前のこと。廃校になった旧川向小学校（沙流川アート館）にアトリエを構え、敷地内の元教員住宅で暮らしながら創作を続けています。幼い頃から絵を描くことが好きだったというこだまさん。大学では油彩を学び、卒業後は札幌の美術予備校で講師を務めながら描き続けていきましたが、それは「何を描きたいのかわからず、もやもやとした気持ちでキャンパスに向かっていました」という葛藤の日々でもありました。

「そっやって行き詰まりを感じながら過ごしていたある日、旅行で日高地方を訪れ、廃校活用の話を偶然耳にしました。平取町には縁もゆかりもなかったけれど、どこでもいいからゼロからスタートしたいと考えてすぐに移住を決意。感覚的には世捨て人に近かったかも（笑）。当時私は20代。しがらみのない場所で絵を描きたい、という思いひとつでこの町にやってきました」

しかし、「新天地でも相変わらず描きたいものがわからず、広いアトリエの隅々で、描いては上から塗りつぶすを繰り返して、小さなキャンバスを灰色にしてみました」というこだまさん。転機が訪れたのは30代に入ってから。日高町に暮らす知人に誘われて、版画作品の制作を始めました。「油彩は後からいくらでも描き直せるけれど、版画は彫ってしまうと後戻りはできません。結論を出すことができる版画は私にぴったりだったのかもしれない」。旅行に出かける時の弾んだ気持ち、金魚が死んでしまった時の悲しみ、玄関先に蛇が顔を出した時の驚き。「作品のために題材を探すのではなく、暮らしている中で感じることに、目に入るものを作る品にするようになりました」。沙流川河口から宿別川



2022年から始めた大人気のカレンダー。動物や植物など身近な存在をモチーフに、数字や文字も手彫り・手刷りで仕上げています。

こだまみわこ

1963年北見市生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。1991年平取町に移住。2015年第21回鹿沼市立川上澄生美術館版画大賞受賞。●沙流川アート館 旧川向小学校を改修し、アトリエや絵画教室として活用している。TEL:01457-2-2127

版画制作のみならず、沙流川アート館内で絵画教室も開いているこだまさん。「油絵も生徒さんたちと一緒に描いています。ずっと悩み続けているけれど、油絵が好きだからやめることはないです。悩みも喜びもひたひたまで、こだまさんは創作に向き合い続けています。



## カラフルで楽しげでどこか不穏な幻想を表現

人っ子だった私は、子どもの頃から暇さえあればマンガの模写やイラストを描いていました。実家の隣が絵画教室で、ご近所付き合いの中で水彩画を描く機会もあり、「絵を描く」ということが自然な環境だったと思います。幼稚園の頃に買ってもらったロジャー・ディーンの写真集は、その奇妙でカラフルなファンタジーの世界に驚き、大人になるまでずっとお気に入りの一冊でした。



「36号線の夜」  
札幌で活動されている劇団THE36号線の稽古風景です。まだ完成に至っていない状態の舞台独特のエネルギー感を表現したく、取材させて頂きました。

大学でも美術を学び、卒業後は札幌で作品の販売や企画展に参加するなど、アクリル画をメインに創作活動を続けていましたが、30歳手前で福祉職に就いてからは10年間ほど絵を描いていませんでした。そんなある日、長男が遊んでいる風景を何ともなしに油彩画で描いてみたところ、今までにない「自分の表現の予感」がして、そのタイミングで油彩画に切り替え、再び絵を描き始めました。

日々の経験や記憶、感動は、作品にも影響を与えています。

例えば20代の頃に友人と旅行したスコットランド。人も建物も色鮮やかなのに、気候が関係しているのか、どこか重たく暗い雰囲気があり、その不

思議な空気感はずっと印象に残っています。ほかにも、演劇や舞踏を見に行った際に感じる、目の前でエネルギーが動き、熱が発生しているという感覚がすごく好きで、影響を受けている部分が少なからずあると思います。

創作する上でもっともインスピレーションを受けるのは、やはり「人」です。踊っている人、食べている人、働いている人、何かよくわからない人。ここ2年ほど劇団の稽古や稲作農家の取材に行くことが何度かあり、その中で目にした動きや雰囲気、それを絵に変換する機会が多々ありました。

今回の個展のテーマはファンタジーです。私の絵画感ファンタジーで始まっているので、原点回帰しようという思いがありました。札幌で活動している俳優・舞踏家の柴田智之

さんと音楽家の林ヒロトさんをモデルにした「人間」(上段左)、不思議なダンス会をイメージした「そのタンツェーリン飛んではのタンツェーリン飛ばない」(上段中央)、色々あるけれど、さあ踊って！という気持ちで描いた「踊ってまっさきりこんなふう」(上段右)などの過去作に加え、新作も発表します。カラフルで楽しげで、どこか不穏な幻想を表現したいと思っています。

今後の創作活動として考えているのは絵本を作ること。子どもたちに鮮やかでヘンテコでちょっと不思議な世界を見てもらいたいと思っています。

## 橋口 潤平

1982年生まれ、釧路市出身。恵庭市在住。道都大学美術学部卒。二十代はアクリル画の制作を中心にPAUL名義で個展、企画展等の活動を行う。現在は油彩画制作を中心に橋口潤平名義で活動。  
●Instagram @junpei\_hashiguchi

北海道文化財団アールスペース企画展 vol.55

橋口潤平個展「橋口潤平と個展 其の三」

2024.3.26～5.30 9:00～17:00 ※土日祝休館 ※都合により臨時休館する場合があります。

場所／札幌市中央区大通西5丁目11大五ビル3F 問い合わせ／011-272-0501

入場  
無料

詳しいSTORYはWEBで



新ひだか町公民館・新ひだか町コミュニティセンターに建つ、同町出身の美術家・谷岡靖則さんの作品「カエル」。谷岡さんは新ひだか町ふるさと大使も務めています。

アート選奨K基金事業

●アート選奨

北海道文化財団では、磯田憲一氏からの指定寄付をもとに、アート選奨K基金を創設。本道の文化の振興発展において敬愛すべき役割を果たしたと認められる個人・団体に、「アート選奨K基金賞」を贈呈しています。

令和5年度の受賞者は、株式会社亜璃西社に決定しました。(賞金10万円 / 記念楯)

株式会社亜璃西社

1988年(昭和63)、道内でベストセラーとなった『札幌青春街図』や『さっぽろ食べたい読本』の編著者で、編集プロダクション「プロジェクトハウス亜璃西」代表の和田由美が創業。出版と編集プロダクションの両輪で、30年以上にわたり地元に着目した出版活動を続けている。

主に北海道に題材を求めた図鑑やガイドブック、歴史書など幅広いジャンルの書籍を刊行。代表的な書籍に、『北海道樹木図鑑』(累計30万部)『さっぽろ野鳥観察手帖』などの自然図鑑、『北海道の歴史がわかる本』『札幌の地名がわかる本』などの歴史読本、故堀淳一さんの記念碑的三部作『地図の中の札幌』『地図の中の鉄路』『地図の中の廃線』、サブカルチャーを記録する『さっぽろ喫茶店グラフィティ』などのグラフィティ・シリーズ、年度版『北海道キャンプ場ガイド』(累計25万部)などのガイドブック、そのほかエッセイ、評論、詩集など幅広いジャンルの書籍を出版。

このほか、企業・団体の社史編集の編集に多数参加しているほか、各紙誌の記事で企画立案から取材・執筆までを手がける。

刊行書受賞歴

- 2006年 第12回 林白言文学賞 『人生、ときどきシェイクスピア』(酒井良一 著)
- 2007年 北海道新聞文学賞(詩部門)  
『砂浜についてのいくつかの考察と葬られた犬の物語』(荒木元 著)
- 2009年 サムライジャパン野球文学賞(特別賞) 『監獄ベースボール』(成田智志 著)
- 2017年 北海道新聞文学賞(創作部門) 『通天閣の消えた町』(沓澤久里 著)

人づくり一本木基金(長原賞・ステウレ・エング人づくり基金)事業

●ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な個人及び団体等に「長原賞 / 地域貢献賞 / 奨励賞」を贈呈しています。

令和5年度は、古谷竜也さんが「奨励賞」を受賞しました。

◎奨励賞(賞金10万円 / 記念楯)

古谷竜也さん(幕別町 / 建具工 / (有)高橋加工部勤務)

北海道立帯広高等技術専門学院造形デザイン科修了後、現勤務先に入社。在学時に技能五輪全国大会で「建具」に出場し、銀賞受賞。翌第60回大会では金賞を受賞。さらに令和5年の第61回大会には「家具」に出場し敢闘賞を受賞。

新事業開始のお知らせ

地域で舞台公演等を実施する際に、舞台技術者に関する人材情報が少なく人員の確保が難しい、というご相談を受け、令和6年度から、地域の文化施設や文化団体等に対して舞台技術者を紹介する事業を開始します。

事業名:舞台技術者派遣コーディネート事業

開始時期:令和6年4月

対象団体:文化施設

地域文化団体

市町村

市町村教育委員会

実行委員会等

詳細については財団ホームページ(<https://haf.jp/>)でご確認ください。

主催公演のお知らせ



©長久手市 文化の家



撮影:滝澤日以

●ままごと短編演劇『つくりばなし』&『反復かつ連続』

柴幸男主宰の劇団「ままごと」11年ぶりの札幌公演。ままごとの短編演劇の名作『つくりばなし』と『反復かつ連続』を豪華2本立てで上演します。

『反復かつ連続』には札幌座の俳優、熊木志保が初参加!

『つくりばなし』(上演時間20分)

『反復かつ連続』(上演時間20分)

※各回終演後に演出家他によるアフタートークを行います。

日時:3月30日(土)13:00開演 / 18:00開演

3月31日(日)13:00開演

会場:扇谷記念スタジオ シアターZ00

入場料:前売券 一般 / 3,000円 U-25 / 2,000円

当日券 一般 / 3,500円 U-25 / 2,500円

問い合わせ:(公財)北海道文化財団 011-272-0501

詳細はこちらから



INFO



WEBマガジン「北のとびら」。冊子にはない情報も!ぜひご覧ください。

WEBマガジンはこちらから! <https://haf.jp/kitanotobira/>